

中国における乳児を持つ母親の粉ミルクの購買行動と その正常化のための啓発の効果

筑波大学医学医療系：徳田 克己

筑波大学医学医療系：水野 智美

要 旨

ドイツやオランダ、オーストラリアなどにおいて、中国人が粉ミルクを買い占めてしまうことから、中国人に粉ミルクを販売しない、販売できる数量を限定するなどの措置が講じられている。なぜこのような事態が生じたのかについては、中国における偽ミルク事件、粉ミルクへのメラミン混入事件が背景にある。これらの事件によって、多くの子どもの命が奪われ、重度の栄養失調、腎臓結石などの病気に苦しむ子どもを生み出した。その後中国では、乳児を持つ保護者が中国製の粉ミルクへの不信感を募らせ、外国製の粉ミルクを買い求める動きが起きるようになった。

また、粉ミルクに関して乳児を持つ保護者は敏感かつ懐疑的になり、さまざまな噂やデマに翻弄されている。

そこで本研究では、中国都市部において、乳児を持つ保護者が粉ミルクをどのように入手し、子どもに与えているのかに関する現状を明らかにするとともに、中国および世界のさまざまな国と地域においてどのように粉ミルクが販売されているのかについて調査した結果を報告する。

中国都市部で生活する乳児を持つ保護者を対象に行ったヒアリング調査の結果、以下のことが明らかになった。

- ・中国製の粉ミルクを購入している家庭は2割に過ぎなかった。外国製の粉ミルクを購入するために、多くの者が「外国の知人から送ってもらう」「外国のサイトで直接購入する」「自身が外国で購入する」などの工夫をしていた。
- ・中国製の粉ミルクの安全性に関する不信感は強く、「身体に悪い成分が入っている可能性がある」「生産過程、保存過程に問題がある」「偽物である可能性がある」という理由を挙げていた。これらは、すべてこれまでの偽ミルク、メラミン混入事件、その他の食品偽装事件の影響を受けていた。
- ・日本の粉ミルクが手に入るならば購入したいかについて尋ねたところ、7割以上の者が購入したくないと述べた。その理由は、放射能汚染の不安、入手困難であり子どもに飲み続けさせられないこと、反日感情、ヨウ素の含有量の問題が複雑に絡み合っていた。
- ・子どもを持つ保護者は、中国政府や企業の発表する資をあまり信用していなかった。内容の信ぴょう性は不確かであるが、口コミの情報を信じて、「危険である」と噂される物を子どもから回避する行動をとっていた。

また、中国の大型スーパーマーケットでどのような粉ミルクがどう販売されているのかを調査した。その結果、高額（900グラム缶につき、日本円にして7000～8000円）の外国製の粉ミルクが最もよく売れていた。また、それよりも高額な外国製のオーガニックの粉ミルクを買う者もいた。我が子に安全な食を提供するために多額の出費をしている現状がうかがえた。

1. はじめに

1.1 研究の背景

1.1.1 中国における粉ミルク事件

中国において、これまでに偽装牛肉、人工卵、地溝油（工場用などの廃棄油を精製された食用油）など、数々の食品の偽装事件、人体に健康被害をもたらす有害物質の混入などの事件が報道されてきた。そのため、中国人は、中国製の食品への安全性に強い不安を持っている。実際に、水野・徳田・西館（2015）は、日本人と中国人に対して、商店で一般に販売されている食品にどの程度の不安があるのかを尋ねたところ、中国人の方が日本人よりも有意に不安を感じる傾向があることを確認した。日本人は、食品を購入する際には国産であれば、ある程度安全であると認識しており、購入の際には値段の安さを重視する傾向があった。

一方、中国人は、そもそも市場で販売される食品に強く不安を示しており、値段の安さよりも、抗生物質が含まれていないことや無農薬であることなど、食材そのものの安全性を強く意識する傾向が確認された。中国人は、年々、食品の安全性への不安から、食品にかかる支出が増え、富裕層になればなるほど、食品にお金をかけていることが確認されている（Fred & Kuo, 2007）。

徳田（2015）が中国の中流以上の乳幼児を持つ保護者にヒアリング調査をした結果、「大人はスーパーマーケットで販売されている野菜を食べても、子どもには契約農家から取り寄せた無農薬の野菜を食べさせる」「外国産の油を使用する」「できるだけ外国の食品を購入する」などと答える者が多く、子どもに対しては大人よりも食品にお金をかけ、食の安全を確保しようとしていることが明らかになった。

中国において、子どもの食の安全を脅かす事件の一つに、偽粉ミルク事件、メラミン入り粉ミルク事件といった粉ミルクに関するものがある。中国人は日本人やアメリカ人に比べて、母乳のみで子どもを育てる家庭が少なく、その割合は約3割にとどまる（Pigeon にっこり授乳期研究会, 2015）。残りの家庭では、粉ミルクを子どもに使用していることから、粉ミルクの問題は乳幼児を持つ家庭には大きな不安を抱かせる。

粉ミルクの事件は、以下のように発生した。

2004年に安徽省で起きた偽粉ミルク事件では、悪徳業者がでんぷんに砂糖や香料を混ぜて、粉ミルクとして販売し、少なくとも50人以上が亡くなり、数百人以上が極度の栄養失調となり、健康に深刻な影響を受けた。なお、中国で定めた基準では、粉ミルクには10%以上のたんぱく質を含まなければならないのであるが、偽粉ミルクには1~6%しか含まれていなかったという。この業者が販売していた偽粉ミルクは、比較的安価であったため、低所得層が購入する割合が高かったが、乳幼児を持つ保護者に「低価格の粉ミルクは危険である」という認識を与えるきっかけとなった。

その後、2008年に三鹿集団が製造する粉ミルクに有毒物質のメラミンが混入していることが発覚し、そのミルクを飲んでいた子ども10人以上が死亡し、10万人以上の子どもが重い腎臓結石、下痢、嘔吐などを患った。メラミンとは、粘着剤に使用される有機化合物であり、食品に含まれてはならない物である。この事件は、2004年の偽粉ミルク事件以降、政府が粉ミルクの中のたんぱく質の含有量をチェックするようになったことが影響している。モラルに欠けた酪農家や乳製品を製造する会社が水を入れてかさを増してつくられた牛乳では、たんぱく質の含有量に問題が生じるため、見せかけのたんぱく質を増やす工作を行う。その一つが、有害物質のメラミンを混

入させ、たんぱく質の含有量を増やすやり方であった。その他にも、牛乳に牛の尿を混ぜ、それに洗剤を入れる偽ミルクも作られていた（富坂，2007）。

三鹿集団は、中国の大手の乳製品の製造会社であり、開発された商品は数々の賞を獲得していたことから、中国政府から「優良企業」と認定され、政府からのミルクの成分の検査が免除されていたという背景がある。また、子どもに重大な健康被害が生じたことが報告されても、三鹿集団はその事実を半年以上にわたって隠し続け、対応をとらなかっただけでなく、政府もその事実があることを知りながら、三鹿集団からの買収によって黙認し続けたという（築場，2012）。

このように、企業のねつ造および隠蔽と政府の管理体制が機能しなかったことにより、世間に公表されることが遅れ、被害が拡大し、そのことが企業や政府に対する消費者の不信感を募らせることになった。

さらに、三鹿集団だけでなく、大手乳製品メーカーの伊利、蒙牛、光明の乳製品を用いたチーズ、アイスクリーム、菓子類などからもメラミンが検出され、それらの製品が回収されることとなった。これによって、三鹿集団だけでなく、中国で生産されるどのメーカーの乳製品も安全ではないと思われるようになった。徐・南石・周・曾（2010）は、これらの事件が発覚する前の2008年7月と発覚後の9月に中国人に乳製品の安全性に関して調査したところ、7月の時点では「中国の乳製品は安全である」と答えた者が8割であったのに対して、9月では2割にまで減少した。このように、中国国民の乳製品に関する信頼は一気にさがり、その不信感は、その後も長く続くことになる。実際に、中国ではドイツやニュージーランドなどの外国で生産されたロングライフ牛乳（2か月以上の長期保存が可能である牛乳）が数多く販売されている（写真1）。

なお、三鹿集団は倒産したが、同じく乳製品にメラミンを混入させていたことが発覚した伊利、蒙牛、光明といった製造会社はそれぞれ「品質改善宣言」を出し、信頼を回復するための努力をしている。たとえば、大手スーパーマーケットの前で、週末にイベントを開催し、安全で安心な乳製品を提供していることをアピールする取り組みを行っている（写真2）。また、政府は、乳製品は国の厳しいチェック体制の下で、安全に生産されていることをPRするためのテレビCMを盛んに流している（写真3）。しかし、これらの取り組みによっても、中国国民の乳製品および粉ミルクの安全性への信頼は確保できているとは言えない状況である。



写真1. 中国のスーパーマーケットで売られているロングライフ牛乳



写真2. メラミン混入事件を起こした会社（伊利）がスーパーマーケットの前で行っているイベント



写真 3. 政府が作成した乳製品の安全性
を PR するためのテレビ CM

1.1.2 粉ミルク購入に関する中国人の行動についての報道

中国製の粉ミルクに対する不安が高まったことにより、中国の国外において、中国人が粉ミルクを購入し、中国に持ち帰る動きがみられるようになった。最初に大きく報道されたのが、香港における中国人による大量購入である。中国人が香港から大量に粉ミルクを持ち出すために、香港の住民が粉ミルクを購入できない状況が深刻化した。それにより、スーパーマーケットや薬局などでは、1人あたりが購入できる粉ミルクの制限を示す紙を貼り出すようになった。

しかし、貼り紙をしても、1人の中国人が1日に何度も来店して購入したり、複数人で買いに来たりするなど、中国人の大量の持ち出しが後を絶たなかった。そこで、2013年3月より、香港政府は「香港からの乳児用粉ミルクの持ち出し制限」を出し、1人あたり（16歳以上）、24時間以内で1.8キロまでの持ち出ししか認めず、これに違反した場合には罰金50万香港ドルと禁固2年の実刑を課すと定めた。

その後、ドイツ、オランダ、オーストラリアなどにおける、中国人の粉ミルクの買い占めに関してしばしば報道されることとなった（記事1、2）。オランダでは、乳幼児を持つ保護者への支援として、政府が粉ミルクの製造業者に補助を出し、粉ミルクは生産コストよりも安く販売され、それによってオランダの粉ミルクは他の国に比べて低価格であった。そこに目を付けた中国の業者がオランダ製の粉ミルクを買占めるようになった。このように低価格で購入した粉ミルクを中国国内で売ってその差額を得るといった転売目的の業者や個人の輸入代行者が続出したことから、オランダでも中国人の購入に制限をするようになった。

ドイツでは、粉ミルクを鍵のかかる棚に入れ、「中国人には粉ミルクを販売しない」と書かれた貼り紙をするスーパーマーケットが続出した。

2016年3月には、中国の全国人民代表大会において、農相（農業部部長）は中国人が外国で粉ミルクを大量に購入していることについて、中国国内の乳製品の製造会社を批判し、中国における乳製品の品質向上と信頼回復が早急に必要であることを指摘している。

ただし、2016年2月29日の中央人民广播电台の記事によると、2015年に中国の国家食品薬品監督管理総局によって行われた検査では、粉ミルクを製造する17社に安全管理上の問題があることがわかり、現在でも製造会社に課題が多く残されていることが明らかになった。

「中国人が粉ミルクを買い占めている！」ドイツで報道続々、販売拒否のスーパーも

2015年2月14日



ドイツで新聞各社がこのところ、「中国人がスーパーマーケットなどで粉ミルクを買い占めている」といったニュースを続々と伝え、大きな話題になっている。「中国人には粉ミルクを売らない」というスーパーも出てきたという。中国・環球時報が9日伝えた。

報道によると、騒動の発端は1月30日、ある現地紙が「ドイツ西部のエッセンで若い中国人の父親がスーパーで粉ミルクを買おうとしたところ、スーパー側が拒否し、父親は『差別だ』と訴えたが店側は取り合わなかった」と報じたことだった。

記事 1. ドイツでの中国人による粉ミルクの買い占めに関する記事（2015年2月14日）

http://www.excite.co.jp/News/chn_soc/20150210/Xinhua_08796.html

大紀元日本

<http://www.epochtimes.jp/jp/2015/02/html/d32253.html>



ドイツでは多くの小売店やスーパーマーケットは顧客1人につき粉ミルク3缶までと制限する対策を講じている (JOHN MACDOUGALL/AFP/Getty Images)

「中国人がまた来た！」 独スーパー、粉ミルクに防犯ロック

【大紀元日本2月13日】ドイツ・フランクフルトの各スーパーや食料品店の売り場では、乳児用粉ミルクが相次ぎ品薄となっている。5日付独大衆紙ビルト(Bild-Zeitung)は、「粉ミルク一掃、中国人が再び攻めてきた！」と題する記事で、「19日は中国の春節。最も人気なお土産はドイツの粉ミルクだ」と指摘した。

それによると、現在、欧州最大の販売量を誇る同国ミルバ(Milupa)社製の粉ミルクやオーガニック粉ミルクのアプタミル(Aptamil)はどのショップでも在庫切れになっている。記者はライン川周辺地域での出生率は著しく上昇していないことから、「間違いなく中国人ママたちが関与している」と断言している。

記事 2. 中国人の買い占めを防止するためにドイツのスーパーではロックをするようになったことを紹介する記事（2015年2月13日）

<http://www.epochtimes.jp/jp/2015/02/html/d32253.html>

1.2 研究の目的

前述のように、中国製の粉ミルク事件の影響で、中国の子どもの保護者は中国製の粉ミルクや乳製品に不信感と恐怖心を抱いている。そのため、粉ミルクや乳製品に対して非常に敏感かつ懐疑的になり、さまざまな噂やデマに翻弄される姿がある。中国の子どもの保護者は、新聞や政府の発表よりもツイッターなどの SNS や信頼できる友人の口コミの情報を信じる傾向があり(徳田, 2015)、粉ミルクに関しても同様のことが言えると思われる。

そこで本研究では、中国都市部において、乳幼児を持つ保護者が粉ミルクをどのように入手し、子どもに与えているのかに関する現状を明らかにするとともに、中国および世界のさまざまな国と地域においてどのように粉ミルクが販売されているのかについて調査した結果を報告する。

2. 中国で乳幼児を育てる中国人の母親に対するヒアリング調査

2.1 研究の目的

中国都市部で生活している乳児を持つ母親にヒアリング調査を行い、粉ミルクをどのように入手し、子どもに与えているのか、粉ミルクの安全性についてどのように認識しているのかを明らかにしたいと考えた。

2.2.1 調査対象者

北京市内、重慶市内、石家庄市内で乳幼児を育てている母親 164 名

2.2.2 調査方法

中国国内で大学教員をしている知人に依頼し、機縁法により、北京市内、重慶市内、石家庄市内で乳幼児を育てている中国人の保護者にヒアリング調査の可否を尋ねてもらった。その中で、ヒアリング調査に協力可と答えた者に対して、個別に半構造化面接を行った(写真 4)。

ヒアリング時間は通訳の時間を含めて、1 人 25 分～60 分であった。調査時期は、2015 年 7 月から 11 月であった。



写真 4. ヒアリング調査をしている様子

2.2.3 調査項目

- 1) 子どもの年齢
- 2) 子どもの性別
- 3) 粉ミルクの飲ませ方(粉ミルク、母乳を卒業した子どもは、飲んでいた当時のことを回答、以下同様)
【選択肢】 粉ミルクのみを使用している、母乳と粉ミルクの両方を使用している、
母乳のみを使用している、母乳や粉ミルク以外を使用している、その他
- 4) 購入する粉ミルクは、決まったメーカーの製品であるのか
【選択肢】 決まった粉ミルクを購入している、いくつかの粉ミルクの中から選ぶ、
特に決めていない、その他
- 5) 最もよく買う粉ミルクの製造国
- 6) 最もよく買う粉ミルクを選んでいる理由
- 7) 現在、子どもに与えている粉ミルクの安心の程度（「非常に安心できる」から「非常に不安である」までの5段階のリッカート尺度）
- 8) 中国製の粉ミルクを購入した経験の有無
- 9) 中国製の粉ミルクを子どもに与えることに対する不安の程度（「非常に安心できる」から「非常に不安である」までの5段階のリッカート尺度）
- 10) 中国製の粉ミルクを子どもに与えることが不安な理由
- 11) 日本製の粉ミルクが購入できるならば、購入したいか
- 12) 日本製の粉ミルクを購入したくない理由
- 13) 日本の粉ミルクは放射能に汚染していると聞いたことがあるか
- 14) 粉ミルクの安全性に関してどこから情報を得ているか
- 15) 中国の行政や企業が出している粉ミルクに関する情報を見るか
- 16) 安全な粉ミルクを入手するために、どのような工夫をしているか

2.3 結果

①回答者の子どもの属性

子どもの月齢の平均は 38.34 か月（±14.53）であり、最も低い月齢は 6 か月、高い月齢は 72 か月であった。子どもの性別は、男児 46%（75 名）、女児 54%（89 名）であった。

②粉ミルクの与え方

調査時点で、粉ミルクや母乳を卒業していた子どもは 35%（58 名）であり、その保護者には、子どもが母乳、粉ミルクを飲んでいた時のことを思い出し、この後の項目に答えてもらった。なお、ほとんどのフォローアップ用の粉ミルクは 3 歳までと粉ミルクに表示されており、一般的には 3 歳になるまでには粉ミルクを飲むのをやめ、一般の食事や牛乳などで栄養素を補うことが必要であると言われている（向井，2000）。しかし、中国においては、粉ミルクは子どもの健康を保持、増進するために必要な栄養素を補ってくれるものとして考えられており、3 歳以降の子どもにも粉ミルクが与えられることが多い。そのため、今回の調査においても、調査時点で粉ミルクを飲んでいる子どもの最高月齢は 65 か月であり、平均月齢は 34.37 か月（±13.91）であった（粉ミルクや母乳を卒業した子どもの平均月齢は 46.49 か月（±11.12））。

粉ミルクあるいは母乳のいずれを使用しているかを尋ねたところ（図 1）、「粉ミルクのみを使用している」と答えた者は 37%（59 名）、「母乳と粉ミルクの両方を使用している」63%（101 名）、「母乳のみを使用している」3%（4 名）であり、ほとんどの家庭で粉ミルクを使用していた。

なお、これ以降は、母乳のみを子どもに与え、粉ミルクを使用していない 4 名を除く 160 名に対して尋ねた結果を示す。

購入する粉ミルクは、決まったメーカーの製品であるのかを尋ねたところ（図 2）、「決まった粉ミルクを購入する」と答えた者は 61%（97 名）が最も多く、次いで「いくつかの粉ミルクの中から選ぶ」31%（49 名）であった。このことより、中国では、子どもに与える粉ミルクを決めたら、その粉ミルクから他の粉ミルクに変えることはあまりないと推測される。

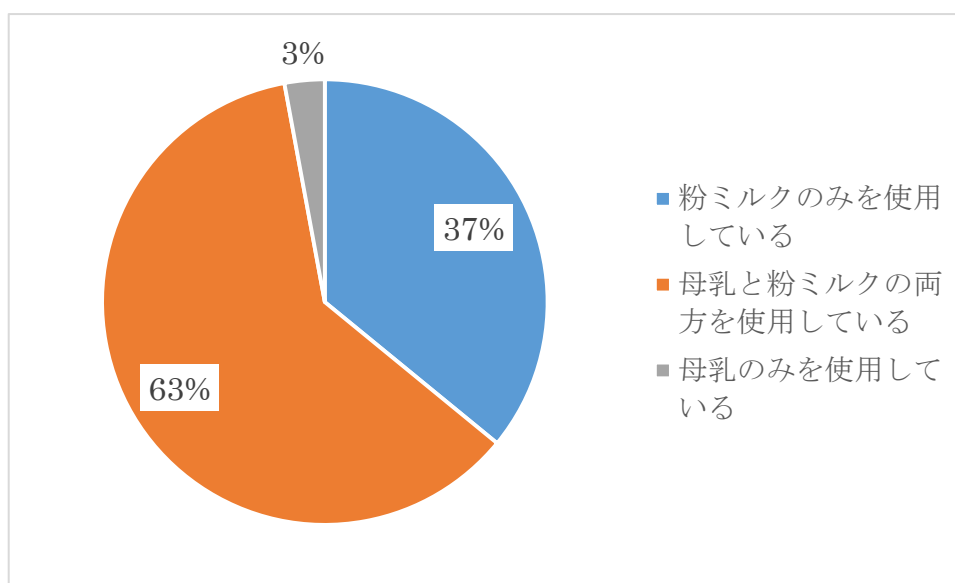


図 1．粉ミルクか母乳のいずれを使用していたか

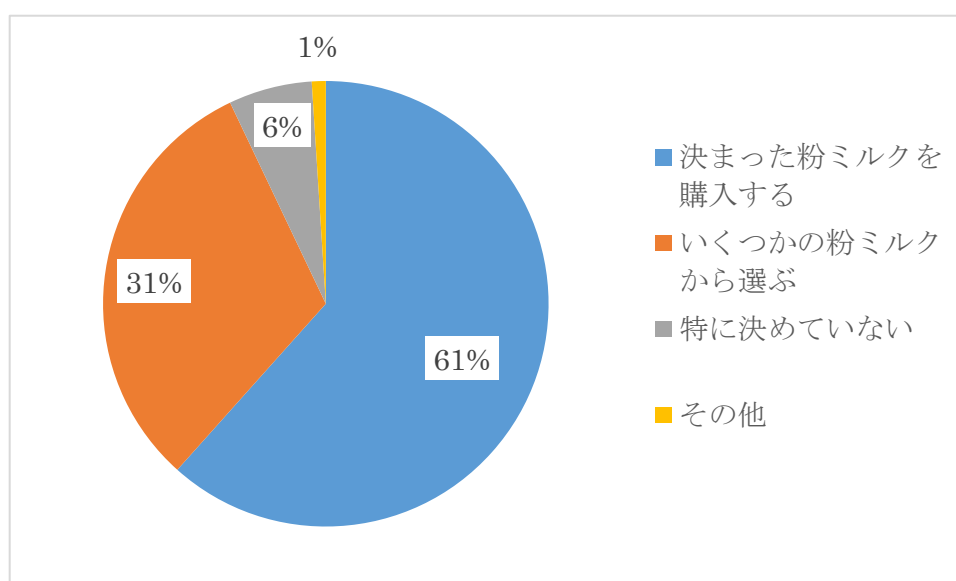


図 2．購入する粉ミルクは、決まったものであるのか

最もよく購入する粉ミルクはどこの国で製造されたものであるのかを尋ねたところ（図 3）、ドイツが最も多く（20%、32 名）、オランダ（19%、31 名）、中国（16%、25 名）、ニュージーランド（13%、21 名）が次いだ。つまり、中国製を購入している者は 2 割以下であり、それ以外の者は外国で生産された粉ミルクを選んでいるのである。なお、日本で製造された粉ミルクを購入している者はわずか 1 名のみであり、その購入者は日本に留学した経験があり、現在、日系の企業に勤める母親であった。

また、中国製の粉ミルクを購入した経験があるかどうかを尋ねたところ、36%（58 名）があると答えた。ただし、購入した経験のある者のうち、40%（23 名）は、一度は中国製を購入したが、その後、二度と中国製を購入することはなかったと述べていた。

最もよく購入する粉ミルクを選んだ理由を尋ねたところ（図 4）、「友人に勧められた」と答えた者が最も多く（36%、58 名）、「身体にいい成分が入っている」（32%、51 名）、「品質が良い」（17%、27 名）が次いだ。また、「中国産に不安がある」（16%、26 名）ために、中国産以外の粉ミルクを選んでいると答える者もいた。なお、中国の都市部にある大型スーパーマーケットの粉ミルクを販売しているコーナーには、販売員が配置されていることが多く、購入者への粉ミルクの案内や説明をしている。しかし、「販売員の勧め」によって粉ミルクを選んだ者は 6%（9 名）しかおらず、販売員の情報よりも、子どものいる友人の口コミ情報を信じる傾向が強いと言える。また、日本では出産後の病院で栄養士などに紹介された粉ミルクを選ぶ者が多いが、中国では病院で勧められたものを選んでいると答えた者はわずか 2 名（1%）しかいなかった。

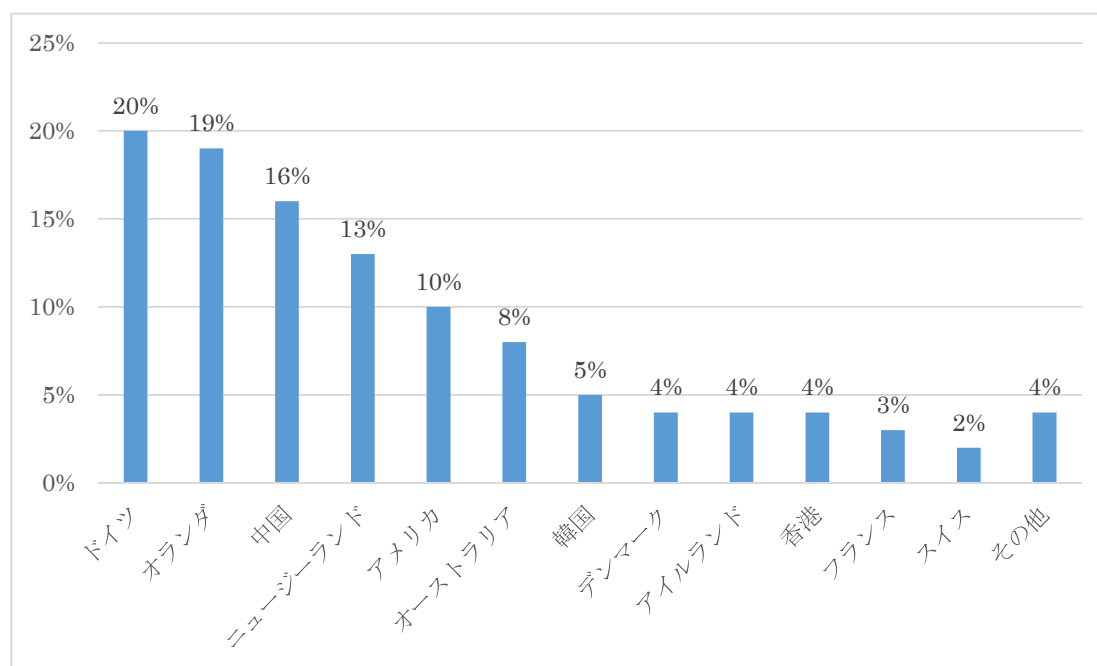


図 3. 最もよく購入する粉ミルクの生産国（複数回答）

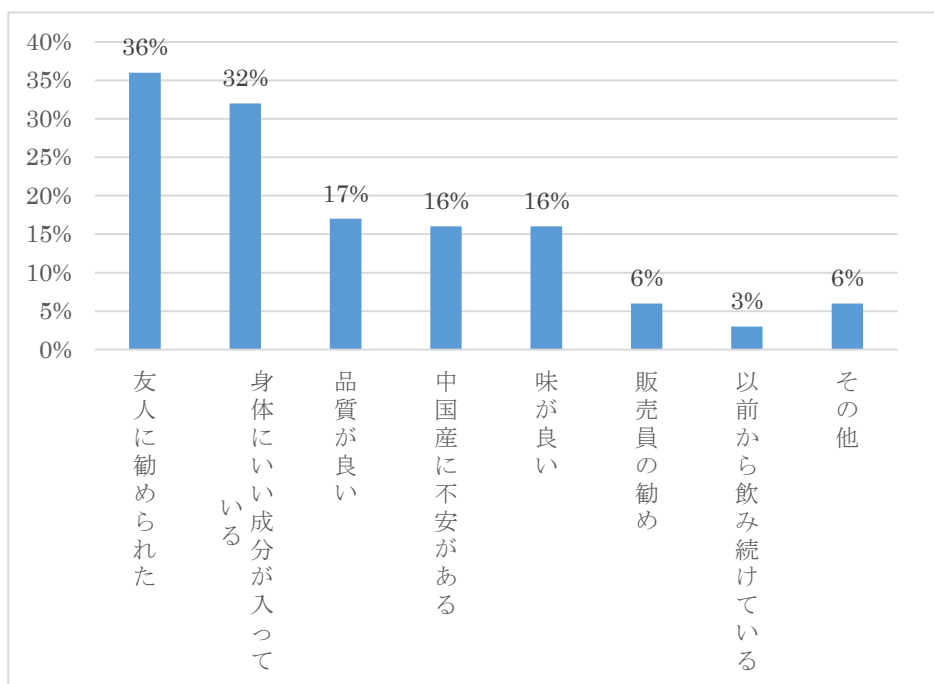


図 4. 最もよく購入する粉ミルクを選んだ理由（複数回答）

③粉ミルクに関する安心の程度

現在、子どもに与えている粉ミルクはどの程度、安心できるのか（あるいは、不安に感じるのか）について、「非常に安心できる」から「非常に不安である」までの 5 段階のリッカート尺度を用いて尋ねた。「非常に安心できる」を 5 点、「非常に不安である」を 1 点とし、平均値を求めたところ、3.92 ($SD = 0.68$) であり、やや安心できている傾向がみられた。

また、中国製の粉ミルクを購入している者 (25 名) と中国製以外（以後、外国製）の粉ミルクを購入している者 (135 名) に安心の程度に違いがみられるかどうかを確かめたところ、有意な差は認められなかった ($t(158) = 1.59$, n.s.; 中国製 $M = 3.72$, $SD = 0.54$ 、外国製 $M = 3.96$, $SD = 0.70$)。

中国製の粉ミルクを子どもに与えることについて、どの程度、安心できるのか（あるいは、不安に感じるのか）について、5 段階のリッカート尺度を用いて尋ねた。その結果、平均値は 2.77 ($SD = 0.96$) であり、やや不安に感じている傾向が明らかになった。中国製の粉ミルクを購入している者と外国製を購入している者で比較した結果、外国製を購入している者の方が有意に不安を感じる傾向が認められた ($t(157) = 6.58$, $p < 0.01$; 中国製 $M = 3.80$, $SD = 0.58$ 、外国製 $M = 2.57$, $SD = 0.90$)。これらのことから、現在、中国製の粉ミルクを与えている者は中国製の粉ミルクを子どもに与えることにそれほど不安を感じているわけではないことが推測される。しかし、8 割以上の外国製粉ミルクを使用している者にとっては、中国製粉ミルクを子どもに与えることは不安を感じているのである。

中国製の粉ミルクを子どもに与えることに不安があると答えた者に対して、どのような不安があるのかを尋ねたところ、111 名から回答を得た（図 5）。回答をした者のうちの 79% (88 名) が「身体に悪い成分が入っている可能性がある」と答えており、メラミンが混入された事件や牛乳、乳製品の偽装事件を例に出し、現在もそれらの事件と同様の偽装が続いている可能性が高いと述べる者が目立った。

なお、一度、中国製の粉ミルクを子どもに与えたら、下痢と嘔吐を起こし、それ以降は二度と中国製を与えていないと答えた者が数名いた。

また、「生産過程、保存過程に問題がある」(20%、22 名)、「偽物である可能性がある」(5%、6 名)と答えた者がいた。これらのことは、粉ミルクに限らず、中国の食品全体に持たれている疑念である。中国では、廃油を精製して食用油を製造した事件、野菜にホルモン剤を投入する事件、ずさんな管理のもとで飼育や保存をされた牛肉や魚介類の事件、本物のように偽装して作られた偽物の卵、はちみつ、醤油などの事件など、さまざまな問題がある(奥窪, 2013; 富坂, 2007; 2014)。これらの偽装事件などを挙げて、中国で生産された食品そのものを信用していないと答える者が目立った。

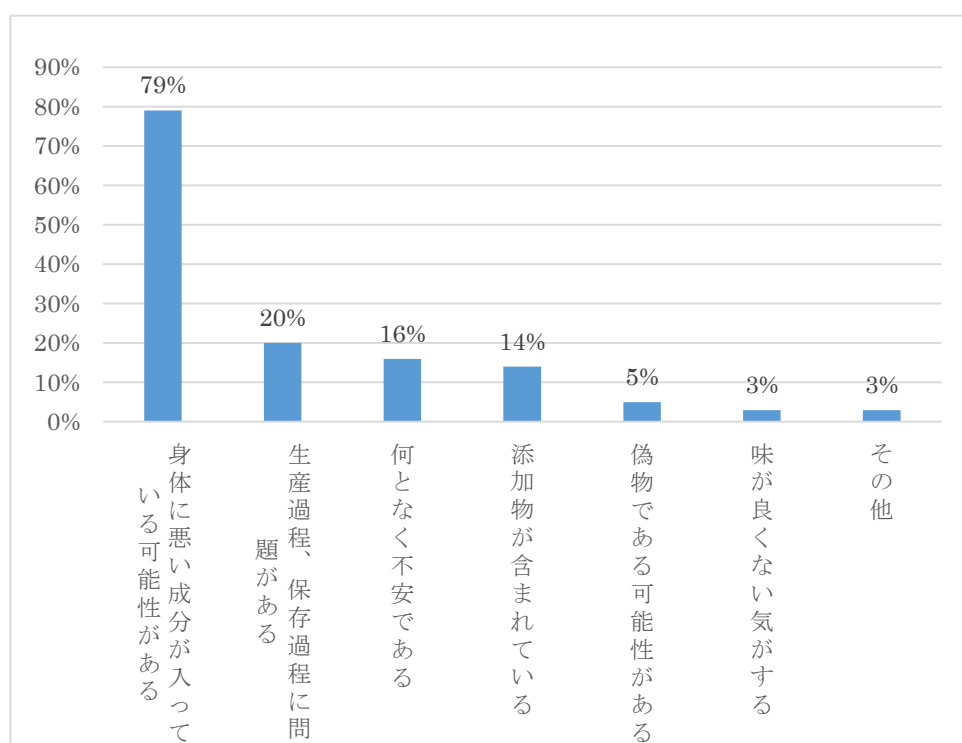


図 5. 中国製粉ミルクを子どもに与えることに対する不安（複数回答） $n = 111$

④日本製粉ミルクの購入に関する認識

日本製の粉ミルクが購入できるならば、購入したいと思うかどうかを尋ねたところ(図 6)、購入したくないと答えた者が 74% (119 名) と大半を占めた。購入したくないと答えた者にその理由を尋ねたところ(表 1)、37 名から回答を得た。その結果、回答をした者のうち、35% (13 名) が「放射能に汚染されている」ことを挙げた。

なお、2016 年 3 月現在も東北、関東地方の 10 都県で生産された食材及びその食材を用いて作られた加工品を中国が輸入する場合には、放射線量を測定した結果と安全である証明書を添付することになっている。そのため、中国内に流通している日本製品が放射能に汚染されている可能性はほとんどない。しかし、このように誤った認識が中国内で広がっている。

また、「入手できない」という回答が 27% (10 名) の者から挙げられた。前述のように、決まった粉ミルクを購入する者が 6 割以上であるため、入手することが難しければ、継続してその粉ミルクを子どもに与えることができない。2010 年に日本において口蹄疫が流行し、中国では日本からの乳製品の輸入が規制されたことをきっかけに、その頃から日本製の粉ミルクがスーパーマーケット等の店頭に並ぶことが少なくなった。さらに、前述のように福島第一原発事故の影響を受けて、日本製粉ミルクが販売されなくなった。実際に、中国の大型スーパーマーケット、薬局では日本の粉ミルクを一切扱っておらず、街中で日本製を購入することは不可能と言っても過言ではない。そのため、続けて買うことができない日本製の粉ミルクは敬遠されてしまうことになる。

さらに、「日本製品を買いたくない」と答えた者が 19% (7 名) いた。反日感情が強く、粉ミルクに限らず、すべての日本製品を快く思っていない者の存在が少なからずあることがわかった。

少数意見であったが、「身体に良い成分 (ヨウ素) が入っていない」と答えた者がいた。2012 年に香港政府が行った粉ミルクの栄養素の検査において、日本製の 4 社の粉ミルクは、ヨウ素の含有量が WHO の基準を満たしておらず、特に和光堂、森永の製品においてその数値が低かった (表 2) ことから、その 2 社の製品は香港内での販売が禁止された。乳幼児期にヨウ素が欠乏することによって、甲状腺の機能障害や脳の発育に支障がみられることから (伊藤, 2011)、ヨウ素の摂取は乳児にとって必要であると考えられている。

一方で、ヨウ素を過剰に摂取しても、甲状腺の機能障害を引き起こすことが確認されている (伊藤, 2011)。日本では昆布などの海洋産物から日常的にヨウ素を取得しており、食品にヨウ素を添加することは、過剰摂取につながることから、添加が認められていない。しかし、アメリカや中国、オーストラリア、スイス、カナダなどでは、食塩やパンなどにもヨウ素を添加し、恒常的に摂取するようにしている。このような背景により、中国人には「日本の粉ミルクには、ヨウ素が入っていない」と認識され、敬遠されている一つの理由となっていた。

「日本製は自国以外には品質の悪い物を輸出している」と述べた者がいた。つまり、日本で流通している日本製は品質が良いが、外国にはそれとは別の粗悪品を輸出しているため、中国で手に入る日本製の粉ミルクの品質も悪いに違いないと述べていた。この回答を聞いたのちに、他の回答者にこの噂を聞いたことがあるかを尋ねると、多くの者が聞いたことがあり、そう思っていたと答えていた。このように、誤った情報が伝わり、それによって誤解が生じて、製品が売れないことにつながることも明らかになった。

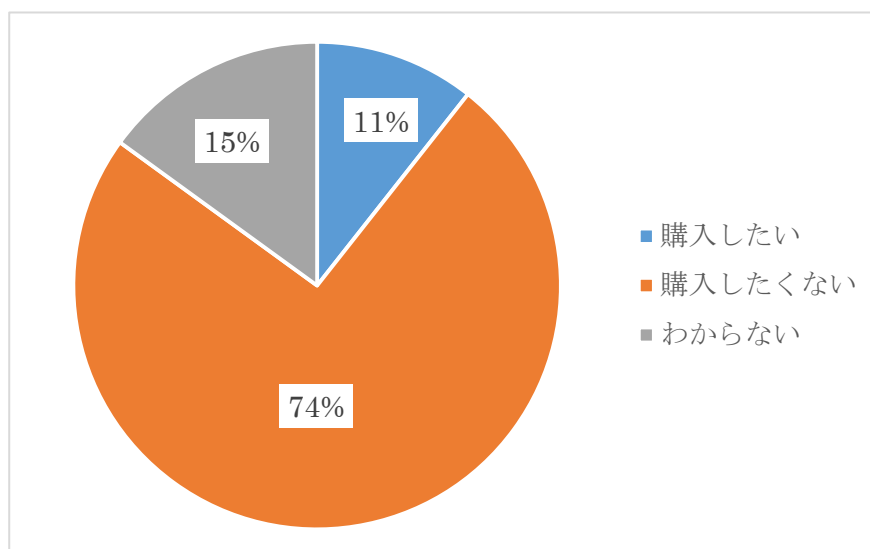


図 6. 日本製の粉ミルクを購入したいか

表 1. 日本製粉ミルクを購入したくない理由 ($n = 37$) (複数回答)

放射能に汚染されている	35%	(13 名)
入手できない	27%	(10 名)
日本製品を買いたくない	19%	(7 名)
周囲が飲んでいない	8%	(3 名)
身体に良い成分 (ヨウ素) が入っていない	5%	(2 名)
日本製は自国以外には品質の悪い物を輸出している	3%	(1 名)
子どもが飲まない	3%	(1 名)

表 2. 香港政府による粉ミルクの含有成分の測定結果

成分/ 營養素	單位	食品法典 委員會標 準	牛欄牌 初生嬰 兒奶粉 1	雪印思 敏兒1 初生嬰 兒奶粉	美贊臣安 嬰兒A+初 生嬰兒配 方奶粉 1	和光堂初 生嬰兒奶 粉	森永初 生嬰兒 粉	雅培皇 牌心美 力初生 嬰兒奶 粉 1	惠氏金裝 「愛兒樂」 初生嬰兒配 方奶粉 (1)
能量	千卡/100克	[60-70千卡 /100毫升]	500	510	490	510	500	510	500
蛋白質	克/100千卡	1.8 - 3.0	2.1	2.3	2.3	2.3	2.3	2.2	2.2
總脂肪	克/100千卡	4.4 - 6.0	4.9	5.1	4.8	5.2	5.0	5.3	5.3
亞油酸	毫克/100千卡	300 -1400*	860	960	900	780	820	1100	890
α-亞麻酸	毫克/100千卡	50 - NS	78	95	77	68	74	110	64
總碳水化 合物	克/100千卡	9.0 - 14.0	12	11	12	11	11	11	12
維生素A	視黃醇當量微 克/100千卡	60 - 180	110	100	180	94	89	100	98
維生素D3	微克/100千卡	1 - 2.5	1.4	1.9	1.5	1.7	1.6	1.5	1.9
維生素 E	α-生育酚當量 毫克/100千卡	0.5 - 5*	2.5	1.7	2.6	0.92	1.3	3.2	1.7
維生素 K	微克/100千卡	4 - 27*	8.2	7.3	12	2.8 ¹	4.3	9.5	11
維生素 B1	微克/100千卡	60 - 300*	120	80	78	91	66	140	230
核黃素	微克/100千卡	80 - 500*	150	270	350	120	180	300	230
煙酸	微克/100千卡	300 -1500*	910	1200	950	1100	700	1100	940
維生素B6	微克/100千卡	35 - 175*	78	84	63	67	61	75	110
維生素 B12	微克/100千卡	0.1 - 1.5*	0.45	0.41	0.44	0.51	0.45	0.48	0.29
泛酸	微克/100千卡	400 -2000*	470	660	700	510	1000	820	820
葉酸	微克/100千卡	10 - 50*	27	13	21	17	28	21	37
維生素 C	毫克/100千卡	10 - 70*	16	17	18	12	11	18	13
生物素	微克/100千卡	1.5 - 10*	4.4	3.5	4.4	<1 ³	1.1 ¹	5.2	4.7
鐵	毫克/100千卡	0.45 - NS	1.1	1.4	1.4	1.5	1.6	2.0	1.3
鈣	毫克/100千卡	50 - 140*	73	70	89	80	71	92	70
磷	毫克/100千卡	25 - 100*	51	46	58	50	45	57	43
鎂	毫克/100千卡	5 - 15*	8.5	7.9	8.8	8.1	9.6	9.1	9.2
鈉	毫克/100千卡	20 - 60	32	24	32	28	27	32	25
氯	毫克/100千卡	50 - 160	71	55	86	57	55	68	72
鉀	毫克/100千卡	60 - 180	100	90	130	93	100	130	92
錳	微克/100千卡	1 - 100*	15	9.1	21	8.5	9.5	26	13
碘	微克/100千卡	10 - 60*	15	8.3 ¹	14	1.2 ²	2.4 ²	27	14
硒	微克/100千卡	1 - 9*	3.3	1.1	2.2	1.2	1.8	2.2	3.5
銅	微克/100千卡	35 - 120*	68	75	120	78	74	79	60
鋅	毫克/100千卡	0.5 - 1.5*	0.78	0.62	1.1	0.63	0.67	0.90	0.98
膽鹼	毫克/100千卡	7 - 50*	18	13	20	12	12	14	12
肌醇	毫克/100千卡	4 - 40*	4.9	6.0	9.2	7.0	11	6.1	6.3
L-肉鹼	毫克/100千卡	1.2 - NS	1.6	2.7	2.5	1.8	2.5	2.5	2.2

香港特別行政區政府 食物安全中心の HP より

< http://www.cfs.gov.hk/english/consumer_zone/foodsafety_Iodine_in_infant_formula.html > (2016.4.20 最終閲覧)

⑤粉ミルクに関する情報

どの粉ミルクが安全であるのかについて、どこから情報を得ているのかを尋ねた（図 7）ところ、「友人」（59%、95 名）と答えた者が最も多かった。前述のように、現在、購入している粉ミルクを選んだ理由にも「友人に勧められた」ことを挙げる者が最も多く、信頼できる友人による口コミを信じる傾向がここでもみられた。また、インターネットを挙げる者が約 4 割おり、インターネット上の口コミを頼りにすると言う者も見られた。

その一方で、テレビ（21%、34 名）、新聞（13%、21 名）といったマスメディアから情報を得る者は友人やインターネットに比べて少なかった。友人やインターネットから情報を得ず、新聞やテレビから情報を得ると答えた者は 8%（13 名）にすぎず、マスメディアだけの情報では十分ではないと考えていることが推測される。この背景には、中国におけるマスメディアが過去に食品偽装の事件を隠ぺいしてきたことが挙げられる。マスメディアから情報を得ると答えなかった者は、「マスメディアの情報はどこまでが正しいのかわからない」と口をそろえて言う。偽装事件が発覚するニュースについては、氷山の一角にすぎず、多くが政府や企業によって情報を改ざんされたり、隠ぺいされたりしていることを指摘し、マスメディアの情報だけを鵜呑みにはできないと述べていた。

同様に、粉ミルクを製造する企業のホームページから情報を得ると答えた者は少なく、かつ、そのように答えた者は全員、外国製の粉ミルクを購入しており、閲覧しているホームページは外国のサイトであった。これらの者も、中国のマスメディアの情報には信頼性がないと答えた。

なお、中国の行政や企業が発表している粉ミルクの情報を見るかどうかを尋ねたところ、52%（83 名）が見ると答えたが、「一応は情報として見るが、そこに掲載されている情報を完全に信じることはできない」「参考までに見る程度である」と答える者がほとんどであった。また、「政府や企業が発表する情報は真実を隠していることが多い」「問題がある点や悪いことを示さない」「企業は政府を買収し、問題があっても一般市民に伝えない」などの意見を述べる者がおり、行政や企業の情報を十分に信用していない傾向があった。

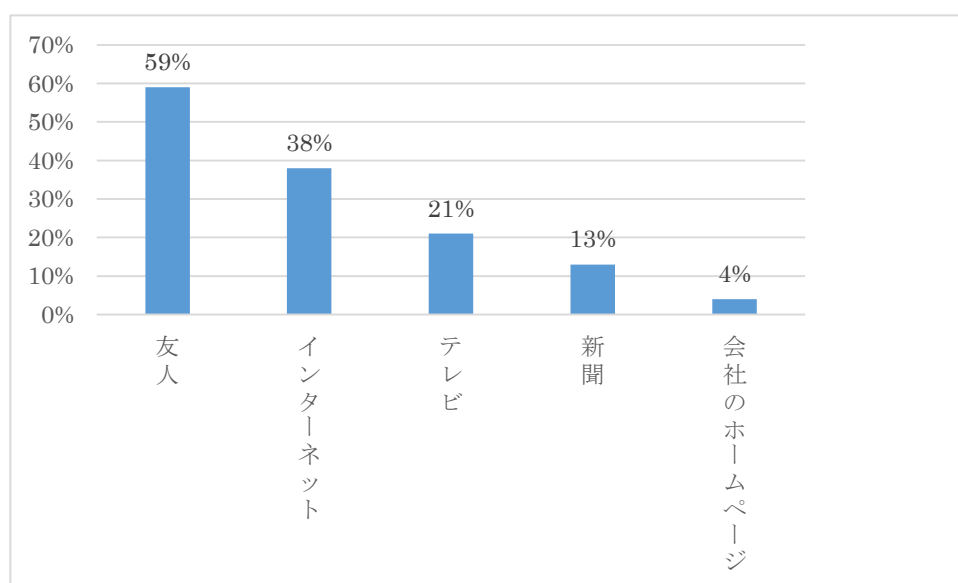


図 7. 粉ミルクに関する情報源（複数回答）

⑥安全な粉ミルクを入手するための工夫

安全な粉ミルクを入手するためにどのような工夫をしているのかを尋ねたところ（図 8）、「知人に聞いたり、ネットの口コミをよく調べる」と答えた者が最も多く（31%、49 名）、上述のように、口コミによる情報を信頼している傾向が強いことがここでも確認された。

また、「外国の知人に郵送してもらう」（30%、48 名）、「外国のサイトで直接購入する」（14%、22 名）、「自身が外国で購入する」（8%、12 名）と答えるなど、外国で購入する者が多かった。これらの者によれば、中国の国内で外国製の粉ミルクを購入すると非常に高価であり、外国から直接輸入あるいは購入した方が、送料を含めても安く求めることができるという。外国の知人に郵送してもらう者については、あらゆる伝手で外国在住の縁故者を探し求め、子どものためになれば多少、強引であっても依頼すると述べていた。

また、「信頼できる大型スーパーで購入する」と答えた者（26%、42 名）にさらに詳しく話を聞くと、大型のスーパーマーケットでなければ、本物とそっくりなパッケージの偽物を販売していることがあり、信用できないと多くの者が答えていた。それだけ、偽物が小売店に横行していることがうかがえた。

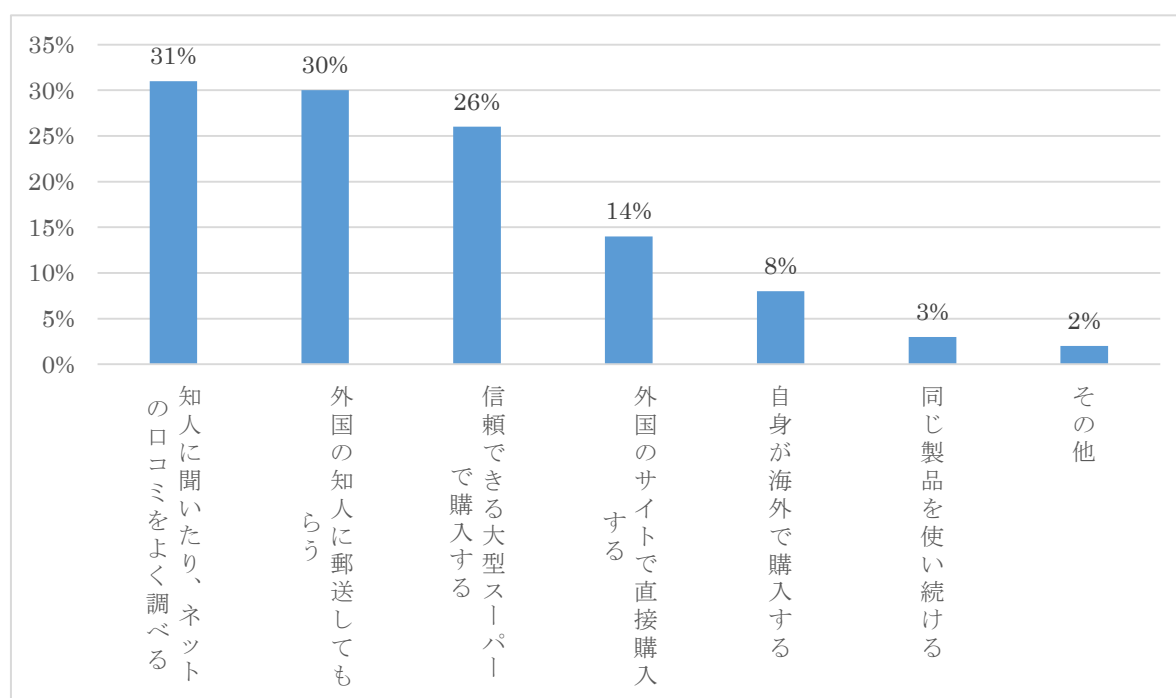


図 8. 安全な粉ミルクを入手するための工夫（複数回答）

3 中国都市部の大型スーパーマーケットにおける粉ミルクの販売の状況

3.1 研究の目的

中国の都市部のスーパーマーケットではどんな粉ミルクが販売されているのか、どのように販売しているのかを明らかにする。

3.2 方法

3.2.1 調査場所

北京市内（8 か所）および上海市内（4 か所）の大型スーパーマーケット

3.2.2 調査方法

それぞれのスーパーマーケットにおいて、販売されている粉ミルクの種類、製造国、値段などを調べた。また、粉ミルク売り場の販売員にヒアリング調査をし、どの粉ミルクをどのような人が購入するのかについて尋ねた（写真 5）。

3.3 結果

ほぼすべてのスーパーマーケットにおいて、販売されている粉ミルクの種類、数量ともに多く、棚一面に粉ミルクを扱うなど、広い面積で扱っていた（写真 6、7）。また、外国製の比較的値段の高い粉ミルクは、装飾の施された販売コーナーが設けられることがあり（写真 8）、高級感をあつらえる作りにして、富裕層に購入してもらうようにしていた。一方、中国製で、比較的安価な値段のビニール袋に入っている粉ミルクは、棚の一番下に配置されていた。

また、妊婦用、0～6 か月用（第 1 ステップ）、6～12 か月用（第 2 ステップ）、12 か月～3 歳用（第 3 ステップ）、3 歳以上学齡期前用（第 4 ステップ）、学童用、学生用、中高年層用、高齢者用などのさまざまな年齢のための粉ミルクが販売されていた（写真 9、10、11）。さらに、ヤギの乳で作られた粉ミルクも販売されていた（写真 12）。中国では粉ミルクは乳幼児が飲むものとは限らず、子どもから高齢者までの健康維持および増進、栄養補給のための飲み物と考えられ、幅広い年齢に対応した商品が陳列されている。日本だけでなく、韓国、台湾、アメリカなどにおいても、フォローアップミルクとして 12 か月～3 歳（第 3 ステップ）の販売はあるが、その後の年齢を対象にした粉ミルクはほとんど販売されていない。3 歳以降になれば、フォローアップミルクから牛乳へ移行するためであるが、中国の場合には牛乳への不信感が強いことが関係していると思われる。



写真 5. 粉ミルクの販売員にヒアリング調査をしている様子



写真 6. 壁一面に売られている粉ミルク 1



写真 7. 壁一面に売られている粉ミルク 2



写真 8. 装飾が施された外国製の高価な粉ミルクの販売コーナー



写真 9. 第 1 ステップから第 4 ステップ
までの粉ミルク



写真 10. 学生用の粉ミルク



写真 11. 中高齢層用の粉ミルク



写真 12. ヤギの乳でできた粉ミルク

中国製の粉ミルクよりも外国製の粉ミルクの方が売り場面積は広く、扱っている商品の数も多かった。扱っている外国製の粉ミルクの生産国は、ドイツ、アイルランド、フランス、オランダ、デンマーク、スイス、スペイン、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、シンガポールであった（写真 13、14、15、16）。ただし、日本製の粉ミルクは調査をしたどのスーパーマーケットでも一切、扱われていなかった。それぞれの粉ミルクの値札に生産国を示しているケースをしばしば見かけた。加えて、外国製のオーガニックの粉ミルクも多数、販売されていた。

0～6 か月用の粉ミルクの値段を見てみると、中国製は安い物で、1 缶（800～900 グラム）につき、約 150 元（1 元＝約 17.5 円、2016 年 4 月現在）であり、添加物が多く含まれるほど値段が高くなる傾向があった。高価なものでは、約 400 元の物まである。このように、中国製の粉ミルクは値段の差が大きい。なお、缶ではなく、ビニールや箱に入っている粉ミルクは、それよりも安価で売られている。ビニールに入っている粉ミルクは、最も安い物で約 50 元程度から販売されていた。



写真 13. アメリカ製であることを示す値札



写真 14. 値札の横にアイルランド製であることが示されている



写真 15. アメリカ製のオーガニックの粉ミルク



写真 16. ドイツ製のオーガニックの粉ミルク

外国製の粉ミルクは、0～6 か月用で 220～230 元程度の物から 500 元を超える物まであった。特に、オーガニックの粉ミルクは、ほとんどが 400 元以上であった。また、生乳を輸入して中国の工場で作っている粉ミルクとすべて外国で生産され、製品として中国へ輸入されている粉ミルクがあった。生乳のみを輸入して中国の工場で作られている粉ミルクの方が、外国で生産されて製品として輸入されている物よりも価格は安かった。同じメーカーの粉ミルクで中身の成分も同じであっても、生乳のみを輸入した粉ミルクは 211 元、外国で生産されて輸入した粉ミルクは 352 元というように、値段に違いが見られた（写真 17、写真 18）。

販売員によると、全体的には、中国製よりも外国製を買う人が多く、だいたい 350 元～400 元の粉ミルクを購入する者が多いとのことであった。また、外国製のオーガニックの粉ミルクは富裕層に人気が高い商品で、450 元～500 元の物もよく売れるようであった。中国製の粉ミルクは全般的には収入があまり高くない家庭が購入することが多いが、中国製の一部の高価な粉ミルクは子どもの成長促進に有効な成分が添加されていることをメーカーがうたっていることから、収入の低くない家庭で購入されることが最近、増えてきたようであった。

多くのスーパーマーケットで、粉ミルクに店内入口の盗難防止センサーに反応するタグがつけられていたり（写真 19）、隣の缶のワイヤーと結んだり（写真 20）、棚に空の容器を置いておき、購入時に中身の入っている商品と交換する手続きをとりかえるなどして、盗難防止の対策が立てられていた。それだけ、中国人にとっても粉ミルクは高価な商品であると言える。



写真 17. 生乳を輸入し、中国の工場で作られている粉ミルク



写真 18. 製造まですべてを外国で行い輸入された粉ミルク



写真 19. 盗難防止のために、タグがつけられている



写真 20. 盗難防止のために、隣の缶と結びつけている

4 世界における粉ミルクの販売の状況

4.1 研究の目的

世界のいくつかの都市で、どのような粉ミルクをどう販売しているのか、中国人がその国で粉ミルクを大量に購入しているのかを明らかにする。

4.2 方法

4.2.1 調査場所

日本（東京）、アメリカ（サンフランシスコ、サンノゼ、ワシントン D.C.）、ハバロフスク（ロシア）、韓国（釜山、仁川）、台湾（台北）、ベトナム（ダナン、フエ）、ミャンマー（ヤンゴン）、アルメニア（エレバン）、エチオピア（アジスアベバ）、南アフリカ（プレトリア）、レソト（マセル）の大型スーパーマーケット、ドラッグストア、量販店

4.2.2 調査方法

それぞれのスーパーマーケットにおいて、販売されている粉ミルクの種類、製造国、値段などを調べた。また、粉ミルク売り場の販売員にヒアリング調査をし、どの粉ミルクをどのような人が購入するのか、中国人が大量に購入するかについて尋ねた。

4.3 結果

日本のドラッグストアでは、日本製の粉ミルクが扱われ、日本製以外の粉ミルクはなかった。また、特にオーガニックをうたっている粉ミルクは扱われていなかった。ミルクアレルギーの子どものための粉ミルク、無乳糖の粉ミルクなど、配慮の必要な子どものための特殊ミルクも扱われていた。特殊ミルクを除き、一般の粉ミルクは、0 か月の子どもから飲ませられる大缶 1 缶につき 1500 円から 2500 円程度であった。

日本では、インターネットで購入する人が多いためか、ドラッグストアの一部のコーナーの一角に置かれているに過ぎず、あまり多くの個数を置いていない。

また、中国人旅行客の団体が大型バスなどで買い物に来る店舗では、中国人が購入することをねらって、目につきやすい通路に日本製の粉ミルクのコーナーを出していたが、中国人は誰一人として日本製の粉ミルクを買い求めようとしていなかった（写真 21）。一方で、紙おむつや日本の薬、化粧品、電気製品などは大量に購入する姿があった。



写真 21. 日本の量販店では、中国人は粉ミルクを買わない

韓国では、中国人が購入することを意識して、粉ミルクの販売コーナーには、中国語で粉ミルクの内容や成分の説明をする表示があった（写真 22）。韓国製が大半を占めたが、アメリカ製、フランス製の粉ミルクを取り扱う店舗があった。韓国では、0～6 か月用の大缶の粉ミルクの値段は、30000～40000 ウォン（2016 年 4 月現在、100 ウォン＝9.7 円）程度であるが、ヤギの乳で作られた粉ミルクのみ 55000 ウォンとやや高かった（写真 23）。



写真 22. 韓国製粉ミルクの成分を中国語で説明している（韓国）



写真 23. ヤギの乳で作られた粉ミルク（韓国）

その他の国で、中国人が購入することを意識して販売をしていたところはなかった。アメリカでは、大缶の粉ミルクは 30 ドル程度に消費税が加算され、高額であることから、中国人が大量に購入をすることはほとんどないと販売員が述べていた。

また、ミャンマーでは、アメリカ製やシンガポール製の高額な粉ミルク（40000～50000 チャット：2016 年 4 月現在、100 チャット＝9.37 円）とフィリピン製やインドネシア製の比較的安価な粉ミルクが販売されていた。（10000～20000 チャット）。ミャンマー人の一般的な生活水準から考えれば、フィリピン製やインドネシア製の粉ミルクであっても、庶民にとっては高価な物であることから、販売コーナーにそれほど多くの製品が置かれていない。

同様に、南アフリカやレソト、エチオピアといった、新興国でも、粉ミルクが販売されていた。これらの国では、南アフリカ製、アイルランド製、フランス製が置かれていたが、その国の一般的な生活者の収入から考えると、値段はかなり高く、購入できるのは富裕層のみであった。

調査をした国の中で、日本製を置いていたのは台湾とベトナムであった。どちらの国、地域ともに日本製以外に、アメリカ製、スイス製、オーストラリア製、韓国製などさまざまな国で製造された粉ミルクが置かれていた。

また、すべての国と地域において、中国製の粉ミルクを扱っているショッピングセンターやドラッグストアはなかった。

5.1 結語

中国政府や中国の粉ミルク製造会社が発表する資料では、メラミン混入事件以降、厳しい管理の下、中国製の粉ミルクの安全性は確保されてきていると述べられている。そのため、本研究の当初の計画では、最終的な目的として、中国人の健康教育の専門家（大学教授）が粉ミルクの安全性について乳幼児を持つ保護者に伝え、中国製の粉ミルクへの安全性の認識を促そうと考えた。それによって、世界の各地で起こる中国人の粉ミルクの爆買い行動に歯止めをかけることができると思われた。しかし、最近になっても、企業の食品管理のずさんさ、安全な食品を作ることに関するモラルの低さ、政府の監督力の低さ、企業や政府による問題の隠蔽体質などが原因となっているさまざまな問題が噴出するとともに、実際に健康被害を及ぼす食品が次々と摘発される事件が明るみになってきた。

調べるほどに、中国の食の安全の問題が浮き彫りになり、粉ミルクだけでなく食品全体に対する中国人の根強い不信感が見えてきた。また、前述のように、2016年2月時点でも、安全管理上に問題のある粉ミルクを製造する会社が17社も存在することが発覚している。そのため、粉ミルクそのものの安全性が必ずしも確かめられているとは言えない状況で、専門家が粉ミルクの安全性を啓発する行為は、乳幼児を持つ保護者に真実を伝えることにはならず、騙す行為になる可能性があると考えられた。そのため、当初の予定であった保護者に対する専門家による啓発とその効果については、時期尚早と考え、本研究から省くことにした。

本研究から、中国人が粉ミルクに関して知人の話やインターネットなどによる口コミを信じて行動し、政府や企業の資料をあまり重視していないことが確認できた。その理由としては、「政府や企業が発信する情報が必ずしも真実ではない」「隠蔽され、知らされていない内容がある」などと市民が考え、公式の情報を信用していないことが背景にあった。ただし、口コミには、必ずしも適正な情報が流れているとは限らない。

たとえば、日本製の粉ミルクは放射能に汚染されている可能性があると考え、日本製を子どもに与えたくないと述べている者がかなりいたが、これも口コミによる誤った情報である。日本製の乳製品は2016年の現在でも、中国に輸入される場合には、福島を含む関東、東北の指定された10都県の製造会社で作られた場合には、放射能に汚染されていないことを示す証明書が必要となっている。そのため、放射能汚染の可能性がない乳製品しか中国にはないにもかかわらず、その事実は伝えられず、「危険がある可能性がある」という理由で受け入れられていないのである。

2010年に日本で口蹄疫が流行した際にも、同様のことが起きた。中国では、市場において日本の乳製品や牛肉の流通を取りやめたが、口蹄疫に感染した牛の肉や乳を口にしても、人間には影響を及ぼさない。このことも、事実と反して「日本の牛肉や乳製品は危険である」という口コミが拡大し、その後も中国人は日本の乳製品や牛肉に対する不安を続けた。

なぜ中国人は、事実かどうかを確かめることなく、口コミを信じる傾向があるのか。中国では事実が明るみにならなかったり、歪曲して報道されることが多く、何が真実であるのかわからないという現状が関係している（徳田，2015）。そのため、ある食品が「身体に危険がある」という情報を得れば、それが真実であるかどうかを確かめるよりも、とりあえず回避したいと考えるのである。粉ミルクに関しても、我が子に対する危険を回避できるのであれば、かなりの高額な商品であっても、安全であると思える商品を選びたいと述べていた。

実際に、どの国や地域と比べても、中国で販売されている粉ミルクは高く、一般的によく購入される物が日本円にして 7000～8000 円であり、最も高額な物では日本円にして約 1 万円であった（日本では、特殊ミルクでなければ、1500～2500 円程度で購入できる）。中国の経済発展により、個々人の経済力が高まると、その分だけ子どもにお金をかけ、子どもの安全をお金で買おうとしているのであろう。また、知人の伝手で外国に住む人を探し出し、粉ミルクを送付してもらうなど、かなり強引な手法をとっても、子どもの安全には替えられないと考えていた。

また、日本製粉ミルクをなぜ中国人は子どもに飲ませないかについては、中国内で手に入らないことが大きかった。手に入らない理由は、上記の放射能汚染や口蹄疫の危険性に関する口コミだけでなく、日本製粉ミルクにはヨウ素を含まないために知的発達に問題が生じる、甲状腺異常が生じると考えられていることが関係している。さらに、反日感情によって購入したくないという者もいる。このように、複雑に理由が絡み合っており、専門家が日本製の安全性を伝えたからと言って、日本製を中国人が子どもに飲ませるようになるには、かなり無理があろう。

粉ミルクに関して情報の正常化を図り、外国での爆買いを止めることには多くの課題があった。中国の企業は食の安全性よりも利益を追求することが優先され、食の安全の基盤が確立されていないこと、企業のモラルが高まっていないこと、政府の監督能力が低いことが前提としてあり、それが食品全体に関する不信感を抱かせていた。

さらに、これまでに政府、企業、マスコミがそれぞれ、事実を隠蔽したり、改ざんしたデータを公表したりしていたために、情報に関しての信頼がなかった。このような状況があるから、一般市民にとっては、経済力で安全を買うという行動をとらざるを得なかったのであろう。

中国の粉ミルクの購買行動が正常化するためには、まずは口コミで適正な情報が流れること、その根拠となるデータを専門家が示し、国民に広げていくところから始めることが必要であると思われる。草の根の運動であるが、口コミで中国国民が適切な認識を持てるように広げていくことによって、経済力だけで安全を担保しようとする動きを止めることができるのではないかと考えられる。

今後は、専門家が粉ミルクに関してどのような情報を子どもの保護者に伝えていくことによって、保護者の認識が変容するのかについて明らかにしていきたい。

文献

Fred Gale & Kuo Huang (2007) Demand for Food Quantity and Quality in China, Economic Research Report, 40, 3-7.

伊藤公一 (2011) 『甲状腺の病気の最新事情ーバセドウ病・橋本病・甲状腺腫瘍ほか』, 主婦の友社.

徐芸・南石晃明・周慧・曾寅初 (2010) 中国における粉ミルク問題の影響と中国政府の対応, 九州大学大学院農学研究院学芸雑誌, 65 (1), 13-21.

唐木英明 (2009) 食品の安全と消費者の不安, 学術の動向, 14(2), 29-37.

栗原伸一 (2005) 食品に対する消費者意識と安全性評価, フードシステム研究, 12 (2), 5-21.

益山光一・堀口逸子・赤松利恵・丸井英二 (2012) 消費者に求める食の安全に関する知識ー日本における食品リスク評価者を対象とした質的調査ー, 日本食品化学会誌, 19 (1) 44-48.

水野智美・徳田克己・西館有沙 (2015) 保護者の食の安全意識と食材購買行動ー幼児を持つ日本人保護者と中国人保護者の認識の比較を中心にー, 日本心理学会第 70 回大会発表論文集.

向井美恵 (2000) 『乳幼児の接触指導ーお母さんの疑問に答えるー』, 医歯薬出版

奥窪優木 (2013) 『中国「猛毒食品」に殺される』, 扶桑社

Pigeon にっこり授乳研究会 (2015) 授乳に関する 3 か国調査

<http://www.smile-lactation.com/jp/news/PDF/news20150324_2.pdf> (2015.3.26)

徳田克己 (2015) マスコミ報道が日本および中国における食の安全性に関する認識と食品購買行動に与える影響, 2015 年度東和食品研究振興会研究報告書.

富坂聡 (2007) 『中国ニセ食品のカラクリ』, 角川学術出版.

富坂聡 (2014) 『中国汚染の真相』, 中経出版.

築場保行 (2012) グローバル化、中国の経営と腐敗、そして外資企業のリスク - 中国・NZ 合併企業・三鹿集団粉ミルク事件を中心に -, 政経研究, 49 (1), 1-23.